

# 大宮境界歩道建築

## ～自衛隊と共生する街～

大宮駐屯地は住宅密集地にあり、その外周は約2kmに及び、街と自衛隊を物理的に隔てる「壁」となっている。

しかし、2kmという長い境界面が街に接し、境界線にゆとりがあるという駐屯地特有の空間的特性は、街と自衛隊がつながる大きな可能性を内包していると考えた。この境界を「街と自衛隊を結び直すための帯」として再定義し、日常的な接点の創出を通して、自衛隊と周辺地域が相互理解を深めていくための新たな「共生」のあり方を探ることを、本研究の目的とする。





② 結びの場 教会/グラウンド



③ バス停 (くだり)



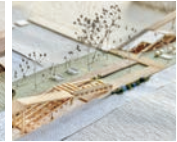
④ 結びの場 住宅/グラウンド



⑤ 立体交差



⑥ 結びの場 住宅/体育館



⑦ 体育館



⑧ 立体交差



⑨ バス停 (のぼり)



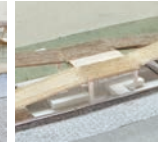
⑩ バス停 (くだり)



⑪ 結びの場 団地/裏門



⑫ 立体交差



⑬ 結びの場 公園/団地



① バス停 (のぼり)



⑱ 結びの場 マンション/グラウンド



⑳ バス停 (くだり)



㉑ バス停 (のぼり)



㉒ 結びの場 住宅/グラウンド



㉓ 結びの場 工場/グラウンド



㉔ バス停 (くだり)



㉕ バス停 (のぼり)



㉖ 結びの場 マンション/グラウンド



㉗ 結びの場 団地/グラウンド



㉘ 立体交差



㉙ バス停 (くだり)



㉚ バス停 (のぼり)



㉛ 結びの場 団地/資料館



㉜ 資料館



㉝ 立体交差



㉞ 講堂



㉟ 結びの場 生研機構/講堂



㊱ 居酒屋



⑭ バス停 (くだり)



⑮ バス停 (くだり)



⑯ 団地改修 50m走レーン



⑰ 団地改修 50mプール



⑱ 団地改修 射撃訓練場



⑲ グラウンド



㉑ 結びの場 コンビニ/空き地



㉒ 結びの場 生研機構/居酒屋



### 「遊歩道と快走道」

体験価値を重視した遊歩道と合理性を重視した快走道を外周に配置。

### 道の立体交差



道を立体交差させ下部に展示空間を設ける。光と人を誘発。

### 結びの場



道の途中に交流の場として「結びの場」を設ける。

### 境界線

駐屯地と街とを隔ててきた境界線を場所ごとに引き直す。

### 改修・改築



周辺の施設を市民に開放、滞留できる空間をつくる。



住宅密集地の駐屯地

# 住宅密集地の駐屯地

全国に約160ヶ所存在する駐屯地の多くは山間部・海岸付近  
=非日常的な場所



数少ない住宅密集地に位置する駐屯地  
=日常的な場所だが敬遠されがち



住宅密集地にある自衛隊は、街と隣り合うものの、平時においてその活動の実態が市民から見えにくい存在でもある。そのため、敬遠されがちな存在として捉えられることが少なくない。

しかしその感情は、必ずしも明確な否定や拒絶によるものではなく、日常的な接点の欠如によって生じた「わからないもの」に対する曖昧な距離感であると考えられる。

現在の日本では、自国がもつ「武力」のあり方をめぐる議論が続いている。それは、日本が世界の中でいかにして攻撃されない存在であり続けるのかを問うものである。

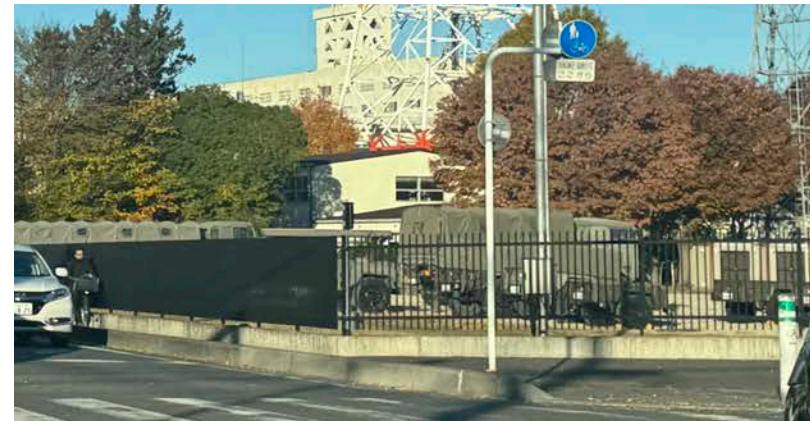
政治の場で、専守防衛という枠組みから、その境界を外へと押し広げる動きが進んでいる今だからこそ、住宅密集地に位置する駐屯地は、壁を外へ押し広げるのではなく、その壁をわずかでも内側に引き、街に向かって開いていくこと、そこにこれからの日本における防衛と日常の関係を考えるきっかけになると考える。

## 街と自衛隊を隔てる 2kmの「壁」

住宅密集地にある駐屯地の中から、大宮駅から約2km圏内に位置する陸上自衛隊大宮駐屯地を対象とする。大宮駐屯地の外周の約2kmは「見えない」壁であったコンクリート状の外周壁は、内部の様子を「感じ取る」ことのできるルーバー状の柵へと変化。この変化は、「自衛隊が街に開く大きなきっかけになる」と考えた。



コンクリートの壁



ルーバーの柵

これまで街と自衛隊を隔てる要因として「壁」のように捉えられてきた「広大な敷地」と「信号のない長い境界線」に加え「境界線にゆとりがある」という駐屯地特有の空間的特性に着目する。



広大な敷地



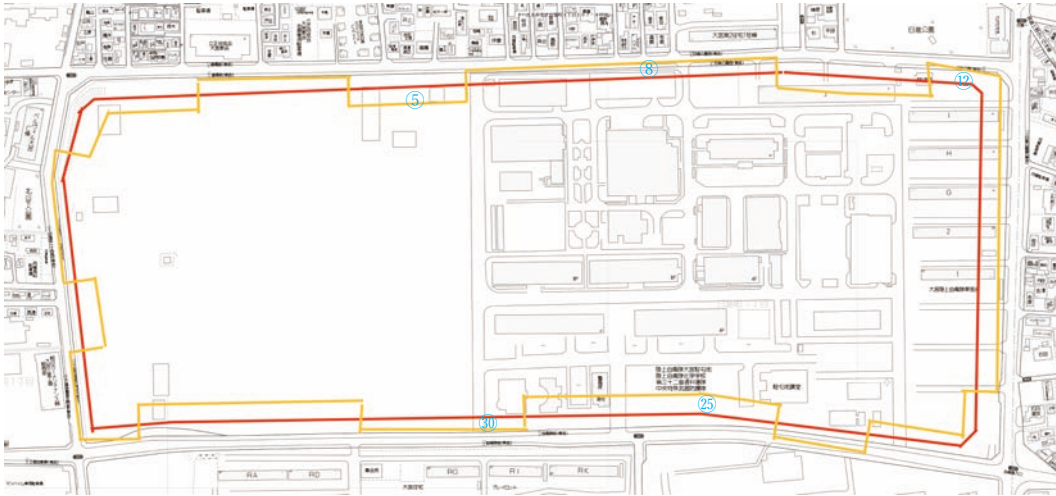
信号がない長い境界線



境界線にゆとりがある

駐屯地を周回する道「遊歩道」「快走道」と立体交差

## 駐屯地を周回する道 「遊歩道」 「快走道」



全体的に境界線を少し内側に引くことで、従来は「内」と「外」を分けるだけであった線は、余白をもった帯状の空間へと変化する。その余白を街と共有される領域として地域住民および自衛隊員を含む、誰もが利用可能な周回型の動線を計画する。

ここには性格の異なる二種類の道として、「遊歩道」と、「快走道」を配置する。

それぞれ約2mのゆとりある道幅を確保することで、「通過する行為」と「立ち止まる行為」対照的なアクティビティが同時に発生し得る環境をつくり出す。

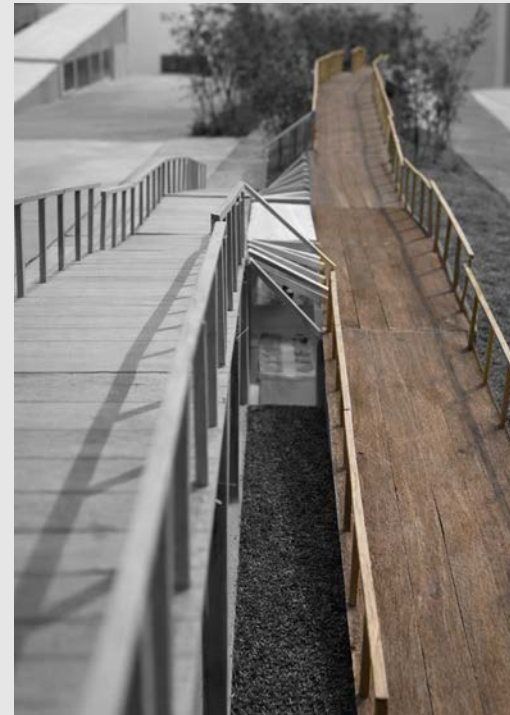
単なる移動空間に留まらず、偶発的な出会いや滞留を許容することで、道そのものが多層的な活動を内包する豊かな都市空間として機能することを意図している。



蛇行する遊歩道は、移動効率よりも体験価値を重視した動線。

視線の変化や途中に設けられたベンチなどの滞留装置により、利用者の楽しさを高める。

ともに、街の賑わいと活性化を生み出す。



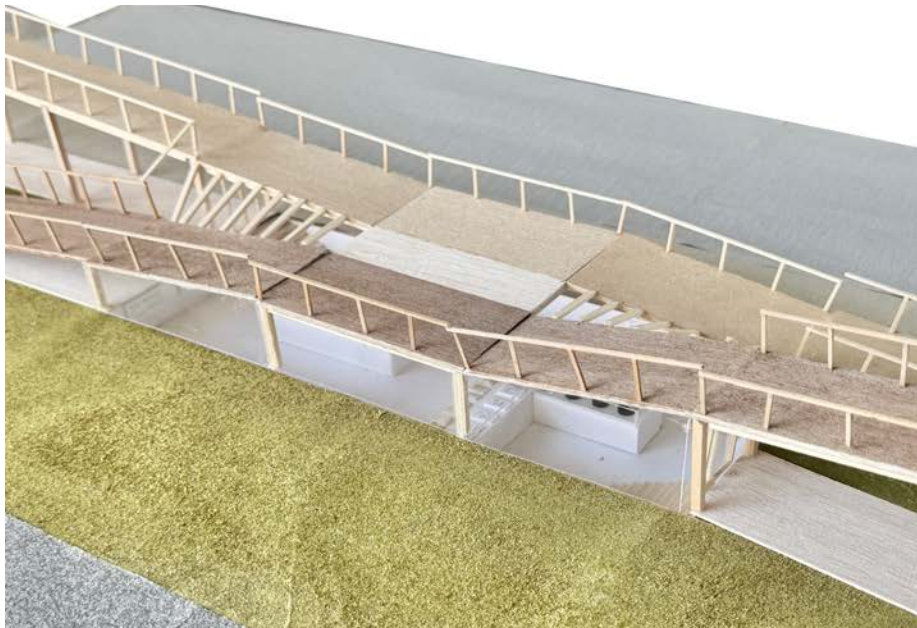
直線的で合理的な快走道

自衛隊員のトレーニング利用も想定しスピード感のある移動を可能とする。

住民と自衛隊員が同じ空間を共有することで、物理的のみならず、心理的な隔たりをもなくし、相互理解深める。

## 2本の道の立体交差 交差が生む展示空間

現在、暗く人通りが少なく、心理的な不安を生みやすい外周部の5箇所において、二つの道の立体的な交差を計画する。これらの交差部の下部には、「自衛隊の活動を伝える展示空間」を挿入し、光と人の動きを誘発することで、活気をもたらし、街の治安維持にも寄与する場を創出する。立体的な交差によって道は場所ごとに高さを変え、歩行や走行に伴う視線の変化が連続的に生じる。これにより、単調になりがちな周回動線に奥行きのある体験が付加され、新たな空間認識を獲得させる。



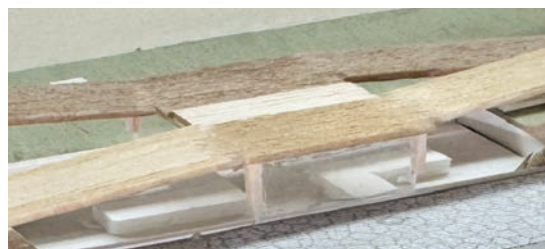
②5木々が多く不気味な雰囲気を与えやすいため立体交差により活気をもたらし。



⑤街灯が一切なくなるため、展示空間を配置し、光を誘発させる。



⑧横断歩道が近いにも関わらず歩暗くなるため歩行者を強調する



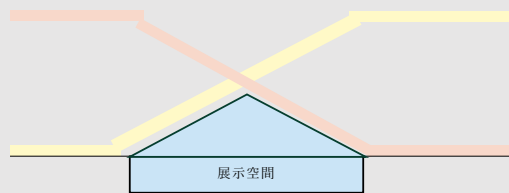
⑭駐屯地側に街灯が一切ないため展示空間を配置し、光を誘発させる。



⑳子供が多く通るが、街灯が少ないため、展示空間を配置し、光を誘発させる。

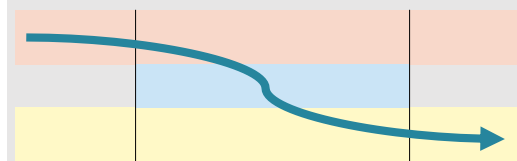


展示空間は地盤面から約1m掘り下げた構成とし、遊歩道および快走道それぞれの下部からアプローチ可能な計画とする。内部では、L字型に配置されたショーケースの間を蛇行するように進む動線を採用し、利用者が自然ともう一方の道へと導かれる空間構成とする。



断面ダイアグラム

交差部では双方の道を相互に行き来できる構成とし利用者がその時々気分や目的に応じてアクティビティを選択できるように計画する。ランニングや散歩といった運動としての楽しさに加え、「立ち寄り」や「滞留」を促すことでこの街における居心地の良さを生み出す。



平面ダイアグラム

街と自衛隊を結ぶ「結びの場」

## 街と自衛隊を結ぶ「結びの場」

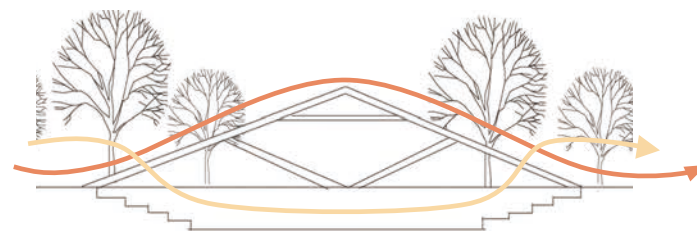


“道”の途中に交流の拠点となる空間を点在させ、「街」と「自衛隊」を結ぶ結節点として機能する「結びの場」を設ける。

結びの場は外周全体に14ヶ所配置し、それらすべてを“道”によって連続させることで、点ではなく線としての滞留を生み出し、街に持続的な活気をもたらす構成とする。

結びの場を貫く“道”は、勾配屋根の上を通過するルートと、掘り下げられた空間へと入り込むルートが交互に現れる構成とする。

遊歩道は結びの場を媒介として蛇行しながら連続し、人の動きや視線は緩やかに変化していく。単なる移動ではなく、空間に導かれるような体験が積層される。



それぞれの結びの場には、道路を挟んで向かい合う街側の施設と、駐屯地内に存在する施設との関係性を読み取り、親和性の高い用途を導入する。さらに、その場所性を際立たせるアクティビティを配置することで、約2kmに及ぶ外周に明確な変化と抑揚を与え、歩行や走行そのものを楽しめる都市的体験を創出し、単調になりがちな周回動線に多様な表情をもたらす。

1ユニットあたり4m×14mという控えめなスケールは、外部空間でありながら包まれるような感覚を生み出し、利用者が無理なく立ち止まれる、自然な滞留を促す。これらの半屋内空間が2～5個組み合わせることで、ひとつの「結びの場」を構成する。



駐屯地内の要素・施設



結びの場



街の要素・施設

街側の施設と駐屯地側の施設、向かい合う用途同士をシンプルに結びつける構成は、街と自衛隊の関係性を明快に可視化する。同時に、それぞれの場所が持つ固有の「色」や性格を際立たせることで、視覚的なリズムが外周全体に生まれ、滞留すること自体が楽しい都市の風景を描き出す。こうして結びの場は、街の中に点在する小さな居場所であると同時に、街と自衛隊をつなぎ、街を内側から躍動させる触媒として機能する。

# 「結びの場」 2 kmにおける体験価値の向上

	向かい側	向かい側要素	空間の強調	駐屯地側要素	駐屯地側
1	立正佼成会	異文化理解の場 作業スペース	教会→ステージ	ストレッチ	グラウンド
2	規格化住宅	ワークスペース 交流	暮らし→ストリートピアノ	武器展示	倉庫
3	住宅	体育館入口	運動→ジム	休憩 スポーツ道具	体育館
4	団地	ランドリー ダイニング	暮らし→シェア自転車	飲み屋 武器展示	裏門
5	公園	自習スペース 寺子屋	子供→アスレチック	親のスペース 集会所	団地
6	コンビニ	盆栽展示 フードコート	誰でも利用→キッチンカー	スポーツ道具	空き地
7	生研機構	ワークショップ VR体験	自然→シェアファーム	屋外席	居酒屋
8	生研機構	資料館 植物園	自然→グランピング	外教室 作業スペース	講堂
9	団地	作業スペース キッズスペース	資料→ライブラリー	来賓部屋 図書館	資料館
10	団地	カフェ ランドリー	独り暮らし→物干し竿	ヨガ 足湯	グラウンド
11	マンション	交流の場 シェアキッチン	暮らし→食堂	休憩	グラウンド
12	工場	資料館 ワークショップ	もの作り→シェア工房	給水所	グラウンド
13	規格化住宅	カフェ	暮らし→ドッグラン	ラップ・音楽を聴く	グラウンド
14	マンション公園	習い事 アトリエ	暮らしと子供→読み聞かせ	騒音理解の場	グラウンド



②教会/グラウンド  
ストレッチ、教会について知ることができる場、作業場を設け、“他文化”が重なることの強調としてフリーステージを配置。



④武器倉庫/グラウンド  
武器倉庫を延長し武器展示の場、作業場、交流の場を設ける。“落ち着いた雰囲気”を強調しストリートピアノを配置する。



⑥住宅/体育館  
体育館用の道具の貸し出し、休憩場を設け、体育館へのアプローチを作り“運動”の強調としてジムを配置する。



⑩団地/裏門  
居酒屋、武器の展示、シェアダイニングを設ける。“人通りが多い”ことからシェア自転車を配置する。

## 「結びの場」 2 kmにおける体験価値の向上



⑬公園/団地  
子供を見守れる親の休憩スペース、  
子供の自習場、寺子屋を設け、“子  
供”が集まる場の強調としてアスレ  
チックを設置する。



⑳コンビニ/空き地  
グラウンド用の道具を貸し出せる  
場、フードコート、盆栽の展示の  
場を設け、強調として“誰もが利用  
できる”キッチンカーを配置する。



㉑生研機構/居酒屋  
居酒屋の席、農業のワークショッ  
プ、VR体験を設置し、“自然”の多  
さの強調で木々を多くし、隙間に  
シェアファームを設ける。



㉒生研機構/講堂  
講堂を外に延長した空間、作業場、  
農業の資料館、植物園を設ける。  
“自然”が多いことを強調して木々  
を多くし、隙間にグランピングを  
設ける。



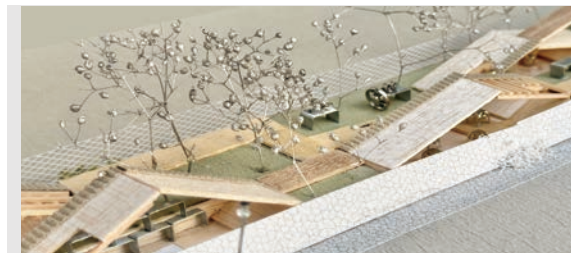
㉗団地/資料館  
来賓者の応接の場、図書館、子ど  
もが遊べる場、作業場を設け、強  
調として人が集まり、滞留しやす  
い場にする。



㉘団地/グラウンド  
ヨガができる場と足湯で休憩でき  
る場、カフェ、コインランドリー  
を設け、“暮らし”の強調で物干し  
竿を配置する。



㉚マンション/グラウンド  
グラウンド利用者の休憩と、交通  
量の多さが生む交流の場、シェア  
キッチンを設け、“暮らす”を強調  
する食堂を配置する。



㉝工場/グラウンド  
グラウンド利用者の給水処、工場  
を知る資料館、ワークショップの  
場を設け、“機械”の強調でシェア  
工房を設置する。



㉞住宅/グラウンド  
自衛隊のラップの演奏を聞ける場、  
カフェを設け“ペット”の散歩動線  
を強調しドッグランを併設する。

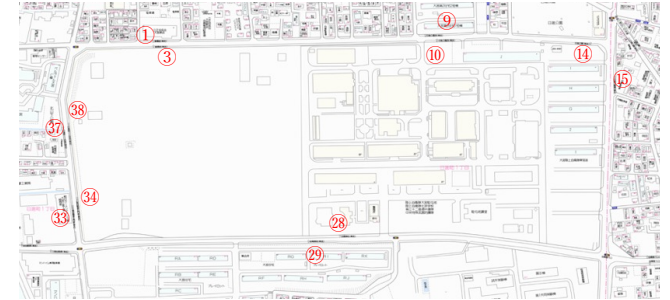


㉟マンション/グラウンド  
自衛隊の説明を聞ける場、習い事、  
アトリエを設け、“子供”が多いこ  
との強調で読み聞かせを配置する。

滞留できるバス停の改築

# 滞留できるバス停の改築

大宮駅への主要なアクセス手段として運行されている路線バスは、上下線合わせて12ヶ所のバス停が点在しており、日常的に多くの利用者を抱える交通結節点として高い機能を有している。これらのバス停を単なる通過点として扱うのではなく、バスを待つ時間や帰路の途中に自然と立ち寄りことのできる滞留の場として再構成し、街全体の居心地を向上させることを目指す。



## 駐屯地側に位置するバス停

視線を緩やかに遮るパネルによって囲われた作業スペースと、自衛隊に関する情報を発信する展示スペースを設ける。パネルによる視線の遮断は、落ち着いた居場所を生み出し、集中して作業や休憩を行うことを可能にする。パネルに掲示される情報は、気軽に目にすることができ、日常の動線の中で自然に自衛隊への興味や理解を喚起する装置として機能させる。

パネルは上部を通過する道の構造体としても機能する。これにより、移動を目的とする利用者と、バスを待つために滞留する利用者との間に、緩やかな関係性が生まれ、異なる行為が同一空間内で重なり合う都市的な風景を形成する。



## 駐屯地の向かい側のバス停

乗車を目的とした上り線の利用が多いことを踏まえ、短時間の利用に適した、滞在の負担を感じさせないオープンな空間として計画する。

それぞれのバス停は、周囲の敷地条件や街の文脈を読み取りながら配置し、過度に主張することなく、街並みに溶け込む存在とすることで、市民にとって親しみやすい場となることを意図している。バスが到着する方向への視線を遮る要素は極力排除し、到着状況や乗車動線を直感的に把握できる構成とする。これにより、利用者は安心してその場に滞留しながらも、乗車行為を妨げられることなく、スムーズに移動へと移行することが可能となる。



# 滞留できるバス停の改築



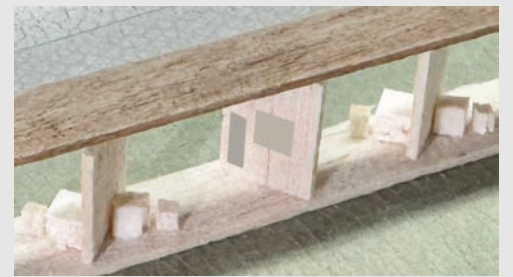
①教会前の空間を広く利用し視認性もあり、開放的な空間にする。



③バスが止まることで横断歩道が死角になりやすいため、バス停を強調し人の集積を可視化する。



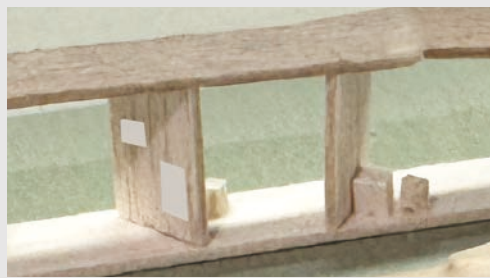
⑨団地の前の花壇のスペースを利用し、視認性の高い空間。



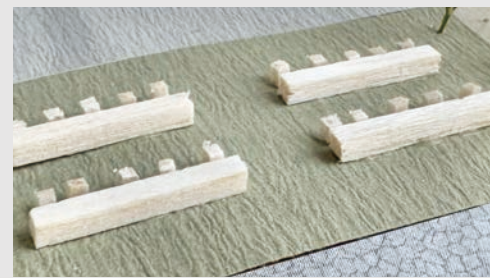
⑩自衛隊員の利用が多いことから自衛隊の情報より作業場を多く設ける。



⑮利用者は他より少ないことから最小限のスペースとする。



⑭他のバス停と比較し、利用者が少ないことから最低限のスペースを設ける。



⑲他よりバスの本数が少ないことから多くの利用者が必然的に滞留するため他よりも多くの人が利用できる。



⑳資料館の延長となるように資料を閲覧できる場を多く設け、この空間を強調する。



③③バス会社前の空間を利用し滞留の場を設ける。バス会社のアプローチを強調する。



③④他のバス停が近いから、利用者は比較的少ない。人が分散できるように、作業場を多く配置する。



③⑦他のバス停と比べ、利用者数が多いバス停であるため、席数も多く設置。



③⑧多層の住民が利用することから、情報発信の場を多く設ける。

訓練を共有する団地の改修

# 需要が減少する団地の改修



J棟	87.5%
I棟	28%
H棟	50%
G棟	58%
2棟	95%
1棟	87.5%



## 住居率（北から）

駐屯地内に、自衛隊員とその家族が生活するための団地が存在する。かつて9棟で構成されていたこれらの団地は、近年6棟へと減少し、さらにそのうちの3棟は住居率が60%を下回っている。この状況から、居住需要の減少とともに、既存の棟の在り方が問われていることが読み取れる。

住居率の低い3棟を対象に改修を行い、住居としてのみならず、街と自衛隊をつなぐ新たな機能を内包した建築として再編する。



2016年まで



現在

3棟の団地が撤去され、現在空き地となっている敷地を活用し、市民が自由に利用できるグラウンドを計画する。この場所を特定の競技や用途に縛られた運動施設としてではなく、街にひらかれた多目的な余白として位置づける。

グラウンドは1周200mのトラック状の構成とし、フットサルの広さのサッカーコートも併設し、走る、歩く、立ち止まるといった行為が自然に循環する空間とする。結びの場に設置されたボールなどのスポーツ用具を自由に持ち出して使用でき、明確なプログラムを与えないことで、年齢や目的、経験の有無を問わず、誰もが関わることのできる場を目指す。様々な運動が緩やかに混在することで、空間には常に人の気配と動きが生まれ、学校の休み時間のような高揚感と雑多さを想起させる。



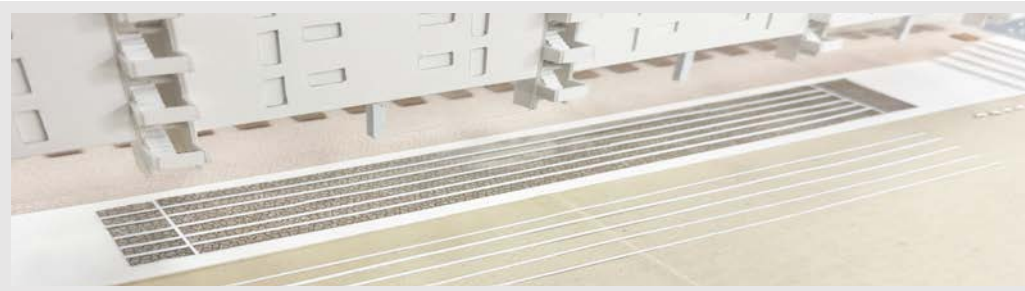
## 訓練を共有する団地の改修

団地が持つ細長い長方形平面を活かし、1階部分を中心にトレーニングゾーンとして「50m走レーン」「50mプール」「射撃訓練」を計画する。住居率の低下によって生じた余白を、街と自衛隊をつなぐ媒介へと転換する。訓練空間を開き、見る・知る・関わるという関係性を構築することで、自衛隊を「遠い存在」から「日常の延長にある存在」へと再定義することを目指す。

### ⑩50m走レーン

50m走レーンを配置する棟は、向かい側に公園があるほか、1km圏内に4つの小中学校が存在するなど、子どもが集まりやすい環境にある。

この立地特性を踏まえ、子どもを含む市民も利用可能な50m走レーンとして計画する。隣接する広場と一体的に利用することで、競技性と開放性を併せ持つ、地域にひらかれた練習場を形成する。



### ⑪50mプール

プールを配置する棟は、道路から過度に視線が入らない内側の棟とし、プライバシーと安全性に配慮した計画とする。

ここには、トレーニングとしても利用可能な50mプールに加え、子どもが利用しやすい小規模なプール、観覧席、更衣室を併設し、多世代が関わることのできる水辺空間を構成する。



### ⑫射撃訓練場

射撃訓練場は、従来グラウンドで行われ、騒音のイメージから周辺住民に敬遠されがちな訓練のひとつである。

この射撃訓練をあえて可視化し、理解の対象として街に提示する。二重ガラスによって安全性と遮音性を確保した上で、その外側に観覧席を設けることで、訓練の緊張感や真剣さが日常の風景として共有される空間をつくり出す。



団地横の境界線はあえて位置を変えていない部分も残している。そこでは、防衛上の機能や緊張感が保たれ、駐屯地が担う役割の重さが静かに示される。すべてを開くのではなく、開かれない場所が存在するからこそ、他の開かれた境界の意味が際立ち、街と駐屯地との関係に現実的な奥行きが生まれると考えた。

市民を取り込むための改修

## 市民を取り入れるための改修 ⑦動線へ開いた体育館



体育館は、スポーツや行事、集会など多様な活動を受け入れることができる用途の柔軟性を持ち、特定の利用者や時間帯に限定されにくい空間である。

警備への配慮が求められる駐屯地においても、市民との接点を比較的導入しやすい施設である。

体育館は身体を動かすという行為を媒介として、自衛隊員と市民が同じ時間・同じ空間を共有しやすく、相互理解が生まれやすい場であることから、閉じられがちな駐屯地と街をつなぐ「公共空間」として適した存在である。



正面に配置された「結びの場」から派生する動線によって再編され、市民の利用を内包する公共性の高い空間へと転換される。これまで駐屯地内部に閉じていた体育館は、動線の引き込みによって街と連続し、日常の延長線上に位置づけられる存在となる。動線に向かって大きく開かれた片流れ屋根は、明確な境界として存在してきた駐屯地の輪郭を柔らかくほぎ、内部へと誘う建築的な身振りをつくり出す。体育館が本来持つ開放性の高いイメージを前面に押し出すことで、市民を迎え入れる象徴的な場として機能させる。



入口の対極にあたる位置には、机や椅子を静かに配置し、アクティビティを強調せず、日常的に「使われ続ける」ための空間とし、体育館という大きなスケールの中に、居心地のよい余白を挿入する役割を担う。



体育館内部では、キャットウォークからデッキへと連なる立体的な動線を計画する。「観覧する」「集う」といった複数の行為を内包し、利用者がどの距離感で関わるかを自ら選択できる空間構成とする。

## 市民を取り入れるための改修 ②6 自由なアプローチの資料館



資料館は、駐屯地内において自衛隊が長年蓄積してきた歴史や活動の資料を保管・展示する知的・教育的空間である。

元来は来賓向けの閲覧施設として限定されていたが、市民に開放することで、駐屯地内に閉じられてきた情報や記憶を街の共有財として再構築することが可能となる。

展示を通じて、市民は自衛隊の活動や社会的役割を理解し、身体的接点を伴わずとも心理的・象徴的に街と自衛隊をつなぐことができ、自衛隊と市民の新たな関係性や相互理解を促す重要な公共空間として位置づけられる。



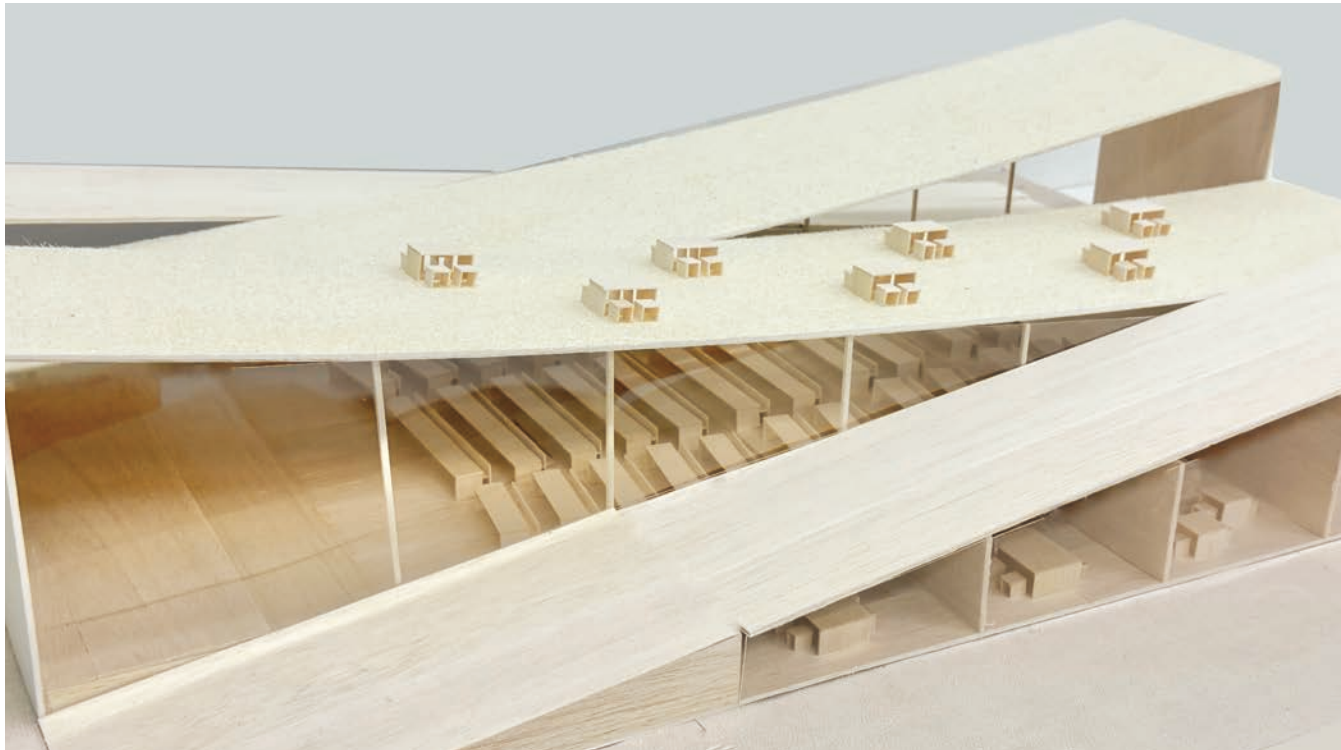
“道”に向かって大きく開かれ、緩やかな弧を描く建物は、6つの展示室によって構成される。それぞれの部屋には特定の正面や明確な入口を設けない。これにより、来館者はあらゆる方向から自由にアプローチすることが可能となり、訪れ方そのものが固定されない、開放的で多義的な展示空間が生まれる。

また、屋根に上がれる動線を設けることで立体的なアクティビティを生み出す。訪れる人々は展示の鑑賞だけでなく、屋根上から周囲の街並みや結びの場の景色を眺めたり、歩いたりすることで、身体的にも空間的にも街との接点を体験することができる。

こうした立体的な動線は、人々の視線や移動のリズムを変化させるとともに、心理的な距離を縮め、街と駐屯地の間に多層的な交流の場を形成する。



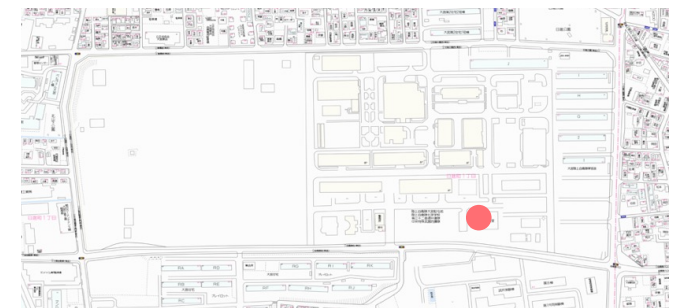
## 市民を取り入れるための改修 ②4 近づく公共 講堂



講堂という性質上の、その閉鎖性を前提とするのではなく、外部に向かって開かれた空間を付加することで、街との関係性を更新する。

屋根の隙間から差し込む光や正面結びの場の木々の景色を眺めることで、閉じられがちな講堂空間に外部環境が重なり、まるで大自然の中で式典や講義が行われているかのような感覚を生み出す。

視覚的なつながりを通して、街と講堂、日常と非日常が静かに交差し、建築に触れ、上り、留まるという行為を通して、講堂は街の中に存在感を持つ。



互い違いに連なる緩やかな勾配屋根によって構成される。屋根に上がれる動線を設け立体的なアクティビティを生み出す。  
勾配屋根を市民が歩くことにより、空間を上下方向に移動しながら体験でき、屋内の座席や講義空間との距離を自由に選択することが可能となる。

内部には自衛隊員、関係者、176人が着席可能な客席に加え、控室や会議室として利用できる諸室を併設する。用途を過度に限定せず、式典、講義、会議など多様な利用に対応できる合理的な構成とする。

視線、光、動線を通して街と接続することで、「近づくことのできる公共性」という新たなあり方を提示する。



## 市民を取り入れるための改修 ②②日常を共有する居酒屋



駐屯地内に存在する居酒屋は、従来自衛隊員専用の閉鎖的な空間であり、街の人々には関わりのない場所であった。

自衛隊員の娯楽の場として長く機能してきた居酒屋を、これまで培われてきた雑多で人間味のある雰囲気を継承しつつ、街へとひらかれた空間へ再構成する。



内部に留まっていた居酒屋の領域を、正面に位置する「結びの場」へとしみ出させ、客席や滞留の場を屋内外に連続的に配置することで、内と外の境界を曖昧にする。

市民と自衛隊員が同じ時間・空間を自然に共有できる場へと再構築することが可能となる。街の活力や滞留を創出すると同時に、心理的距離を縮め、閉鎖的な印象を穏やかに変換する重要な施設となる。



駐屯地内に既存する公共性の高い体育館、資料館、講堂、居酒屋を改修し、境界線を大きく内側へと引き込み、市民を積極的に駐屯地の内部へと迎え入れる構成とした。ここでは、イベントや公開施設、学びや交流の場などを通して、自衛隊の活動や思想に直接触れることができる。内部に足を踏み入れるという行為そのものが、これまで曖昧であった「わからなさ」を具体的な経験へと変換し、防衛と日常との関係を自分自身の問題として捉え直す契機となることを意図している。